

国語部会 研究の構想（案）

令和6年度～

I 研究主題

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか。

II 主題設定の趣旨

学習指導要領では、これまで教育課程全体で育成を目指してきた「生きる力」を、資質・能力としてより具体化した姿で示している。それは「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱で構成されている。そして、これらの資質・能力の育成に当たって、中核的な役割を果たすのが、各教科等の本質に根ざした「見方・考え方」である。国語科における「言葉による見方・考え方」とは、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。つまり、国語の資質・能力を育成するためには、言葉による見方・考え方を働かせて言語活動に取り組み、思考・判断・表現することが重要だということである。また、教科横断的な視点からも、全ての学習の基盤となる言語能力を高めるために国語科が果たす役割は大きい。

令和3年度から3年間は「言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか」という研究主題で研究を進めてきた。その結果、生徒一人一人が言葉による見方・考え方を働かせ、言葉に着目して言語活動に取り組むことが、国語の資質・能力の育成につながると確かめられた。しかし、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかはっきりしない場合もあった。そこで、今年度は、言語活動と身に付けさせたい資質・能力との関連を明確にし、取り組んだ言語活動を通して、どんな力が身に付いたのか、評価場面や評価方法を工夫して評価し、指導改善や学習意欲の向上につながる研修を進めていきたい。そして、言葉への自覚を高め、それを生かして資質・能力を育てる授業づくりを推進していきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

身に付けさせたい資質・能力を明確にし、ねらいに適した言語活動を通して、国語の資質・能力を高めていくための授業づくりに取り組み、評価の場面や方法を工夫して指導改善や学習意欲の向上につながる研究を進める。

2 研究内容

- (1) 付けたい力を明確にする研究
 - ① 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。
 - ② 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。
- (2) 育成したい資質・能力を明確にした単元構想の工夫
 - ① 教材研究によって教材の特性を明らかにする。
 - ② 取り入れる言語活動の特性を明らかにする。
- (3) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫
 - ① 生徒が学習に見通しをもったり、学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ② 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程と、考えを深める交流活動を工夫する。
- (4) 指導改善や学習意欲の向上につながる評価の研究
 - ① 指導事項に基づいて評価規準を作成し、指導と評価の一体化を図る。
 - ② 指導と評価計画を踏まえて学習活動を構想する。
 - ③ 学力調査におけるS-P表等を活用した分析から、今後必要な指導を明確化する。
- (5) 情報の扱い方に関する研究
 - ① 「思考力・判断力・表現力等」を育成するために、情報と情報の関係や情報の整理について研究を進める。

国語部会 令和6年度研究計画（案）

I 研究主題

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか。

—身に付けさせたい資質・能力を明確化した授業づくりと指導に生かす評価—

II 主題について

令和3年度から5年度までの3年間は、「言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を高める指導はどうあればよいか—言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫—」という研究主題で、授業実践を行ってきた。説明的な文章を題材にした実践では、筆者の主張と根拠を理解し、論理の展開の妥当性を考える学習活動を設定することで、自分の考えを交流し合う生徒の姿が見られた。また、討論の在り方について考える実践では、ICTを活用し、前もって討論の様子を動画で撮影したものを題材にして、自分の話し方を観点に沿って振り返ることで、相手の立場や考えを踏まえながら話し合いを進める大切さに気付くことができた。

しかし、言語活動と身に付けさせたい資質・能力との関連が不明確なため、単元を通してどんな力が身に付いたのかがはっきりしなかったという課題が見られた。指導事項を基にした明確なねらいをもった単元構想の在り方を工夫する過程で、どのような力を身に付けさせるために、どのような言語活動を仕組むのかということ、今一度吟味していく必要がある。さらに、評価場面と評価方法を工夫することで、教師の指導改善につながる学習評価の充実を図っていくことが望まれる。

そこで、今年度は、研究主題を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか」とした。「なぜこの言葉を使ったのか」「なぜこの文章構成にしたのか」など、言葉による見方・考え方を働かせる発問や問い直しを意識して行い、言葉への自覚を高め、それを生かして資質・能力を育てる授業づくりを目指していく。そのために、生徒が根拠を明確にしたり、情報を比較・関連付けたり、文章の構成や論理の展開、表現の仕方に着目したりできるよう、単元の指導事項を明らかにして指導をする必要がある。また、生徒の学習意欲を引き出し、教師の指導を改善するために、指導と評価の一体化を目指す。そこで、指導事項と評価規準の関連、単元のどの場面でどのように評価するのかということ、これを工夫するために、副題を「身に付けさせたい資質・能力を明確化した授業づくりと指導に生かす評価」とした。

単元全体を通して、身に付けさせたい国語の資質・能力は何かを明確にし、単元を構想する必要がある。指導事項の確認、単元の日標の設定とそのために適した言語活動を吟味して、授業づくりをしていきたい。また、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、評価場面の設定や評価方法の工夫により、学習の過程や成果を評価して、指導改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かしていく研究を進めていきたい。

III 研究内容とその視点

1 付けたい力を明確にする研究

- (1) 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。
 - ① 各領域の指導事項や各学年における指導内容、言語活動例の系統性について具体的に解釈する。
 - ② 指導事項を指導するために効果的な言語活動を学習過程に位置付け、その言語活動を通して資質・能力を育成する。
- (2) 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。
 - ① 生徒が身に付けている力や学習状況について実態を把握する。
 - ② 小学校や前学年までに身に付けている力の診断的な評価や意識調査を実施する。
 - ③ 各調査等の結果から、指導が求められている能力を的確に把握する。

2 育成したい資質・能力を明確にした単元構想の工夫

- (1) 教材研究によって教材の特性を明らかにする。
 - ① 言葉への自覚を高めるという視点から教材の特性を理解する。
 - ② 教材の提示や取扱い方を工夫する。(実生活との関わり、言語への興味・関心の喚起、内容的価値の理解、言葉のもつ価値の認識等)
- (2) 取り入れる言語活動の特性を明らかにする。
 - ① 育成を目指す資質・能力を身に付けることができる言語活動かどうかを吟味する。
 - ② その言語活動と指導事項との関係が明確であるかを吟味する。

3 「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫

- (1) 生徒が学習に見通しをもったり、学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ① 生徒が言葉を意識しながら、思考・判断・表現できる学習課題を工夫する。
 - ② 学習の目的や見通しがもてる導入を工夫する。
 - ③ 自分の学びや変容について、客観的に振り返る終末を工夫する。
 - ④ 生徒が互いのよさや学びを認め合うことができる、相互評価を工夫する。
- (2) 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程と、考えを深める交流活動を工夫する。
 - ① 一人一人が自分の考えをもつ時間を十分に確保する。
 - ② 何を目指し、何について議論するのか、ねらいの達成に向けた効果的な交流活動を設定する。
 - ③ 思考の流れを視覚化する板書、思考・判断・表現を促す発問、ワークシートの活用やノート指導の方法を工夫する。
 - ④ 主体的な学びや対話的な学びを活性化させるICTの活用方法を工夫する。
 - ⑤ ねらいに応じた適切な学習形態を工夫する。

4 指導改善や学習意欲の向上につながる評価の研究

- (1) 指導事項に基づいて評価規準を作成し、指導と評価の一体化を図る。
 - ① 単元で取り上げる指導事項に基づいて単元の評価規準を設定する。
 - ② 単元や題材等、内容や時間のまとまりを見通し、評価計画を工夫する。
 - ③ 生徒の具体的な姿や表現に基づき、実際の学習活動を踏まえて「おおむね満足できる」状況(B)を設定する。
 - ④ 実際の評価を生かし「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行う。
- (2) 指導と評価計画を踏まえて学習活動を構想する。
 - ① 評価場面と評価方法の適正化を図る。
 - ② 3つの観点を適切に評価できるように、評価資料とその活用の仕方を工夫する。
 - ③ 「おおむね満足できる」状況(B)の具体的な姿と「努力を要する」状況(C)への手立てを設定する。
- (3) 学力調査におけるS-P表等を活用した分析から、今後必要な指導を明確化する。

5 情報の扱い方に関する研究

- (1) 「思考力・判断力・表現力等」を育成するために、情報と情報の関係や情報の整理について研究を進める。
 - ① 話や文章に含まれている情報と情報の関係を捉えて理解し、表現できるように指導を工夫する。
 - ② 情報を活用する際の整理の仕方やそのための具体的な手段を工夫する。

IV 研究方法

- 1 県、郡市や学校単位で指導案や指導資料等のデータを作成し、収集、整理、提供の円滑化を図る。
- 2 郡市や学校単位で、指導計画、授業や実践事例等について協議、情報交換し、研究を進める。
- 3 全国学力・学習状況調査や中教研究学力調査を活用し、研究の推進及び指導の改善に努める。
- 4 実践的に研究に取り組み、成果と課題を明確にすることで、PDCAサイクルを機能させ、カリキュラム・マネジメントの充実を図る。

